

が可能となる0.2mm以上の粒径は総重量の約50%を占めた。

今後は、活性汚泥処理水中のT-P、NH₄-N濃度等が季節によって変動しても、回収された結晶物を全量、機械やろ過で分離回収できる技術を確認し、できる限り低コストでの製品化につなげていきたいと考えている。

また、回収された結晶物（MAP）については、慣行リン肥料と同等の施用効果があり、さらに陶器の釉薬などの利用にもできることから、商用利用の可能性について、併せて検討していくことにしている。

おわりに

本研究を実施するに当たり、「既存汚水槽を活用した技術」については、「新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業」の研究課題である「結晶化法によるリン除去回収技術の簡易化・低コスト化手段の開発（課題番号：18066）」により、また、「養豚汚水を脱水機により分離した脱水ろ過液を対象とした技術」および「養豚汚水の活性汚泥処理水を対象とした技術」については、(株)戸上電機製作所（佐賀市）との共同研究により実施した。本研究に協力いただいた関係諸氏にこの場を借りて感謝申し上げます。

(わきや ゆういちろう・佐賀県畜産試験場中小家畜部畜産環境・飼料研究担当係長)

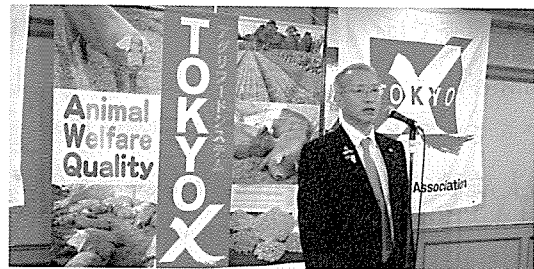
ト ピ ッ ク ス

競争力のあるTOKYO Xの販売展開を目指して —平成25年度 TOKYO X-Association総会が開催される—

東京生まれの高品質ブランド豚肉「TOKYO X」を取り扱う小売店やレストラン、流通企業で組織する流通団体「TOKYO X-Association」は、5月9日、東京都八王子市のホテルで平成25年度総会を開催した。

冒頭、植村光一郎会長が、24年度の活動を振り返り、「28戸の生産者が8900頭を出荷。販売認定店が現在145社337店になり、前年から60店舗も増えた。販売促進は、東京の名産として味わってもらうために、販売店の協力を得て、東京スカイツリーエリアでの飲食や東京マラソンでのランチパック販売の展開、地域振興に貢献するTOKYO X肉うどんを開発した。このほか、広報活動は小中学校の社会科授業と食育活動、農業系大学でのTOKYO Xをモデルとしたフードチェーンの説明など広報活動も精力的に実施した」とあいさつ。続いて、具体的な事業報告と25年度の事業計画などが説明・承認された。

低利用部位の有効活用とTOKYO XのPRを目



交流会であいさつする植村光一郎会長

的に、規約の見直しも行われた。TOKYO Xは原則、都内の指定店でしか販売できないが、食肉加工・調理品の場合は指定店に限らず販売できるようにしたもの。加工品を通じて広く味の良さを知ってもらうことでTOKYO XのさらなるPRにつなげようというねらいがある。

総会の後は、農林水産省食肉鶏卵課の富田育稔食肉需給対策室長が記念講演。食肉需給等の動向や経営安定対策を説明した後、「攻めの畜産」として食肉輸出をめぐる状況や輸出対策の概要、6次産業化等の推進の動きを紹介した。

(砺波 謙史)